

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- 駒澤大学のFD元年
- ファカルティ・ディベロップメント (FD) って何?
- 「学生による授業アンケート」の実施状況
- 「学生による授業アンケート」を実施して
- 「駒澤大学FD推進委員会」設置
- 駒澤大学FD推進委員会委員名簿
- 小委員会の活動について
- FD勉強会で感じたこと
- FDと私
- これまでの学部・学科等でのFDの取り組み
- FD活動の今後の期待
- 駒澤大学FD推進委員会の今後の活動予定
- 駒澤大学FD推進委員会規程

FD研修会開催

日時：2005年2月28日(月)14:30

場所：1-201 教場

テーマ：「実践的授業改善の方法」

プログラム： . 講演

. ワークショップ

. 講師を囲んで懇談会

対象：専任教職員

駒澤大学のFD元年

駒澤大学FD推進委員会委員長

学長 大谷 哲夫

大きな時代の変革期を迎えて、社会構造全体が抜本的な改革を迫られている。高等教育機関においても同様であり、長引く経済不況、就職率の低下、少子化、そして2007年には大学全入時代の到来など、従来の考え方ややり方のままでは社会の要請に応えられない状況に到っており、各大学において改革のための真剣な取り組みがなされている。

本学においても、「駒澤大学21世紀プラン」を策定し、キャンパス整備、教育研究組織、事務組織の整備等を鋭意進めているが、その中でもファカルティ・ディベロップメント(FD)は最重要課題であると言えよう。

言うまでもなく、大学は学びの場であり、教員と学生とが協力して知的生産を行う場である。この目標を達成するためには教育と学びの質を向上させるためのさまざまな創意工夫とその達成を可能にするような全学的な取り組みが必要なのである。

本学では2003年4月に、全学自己点検・評価委員会のもとに設置された「FD検討ワーキンググループ」において、駒澤大学におけるFDについての研究、検討を行い、2004年4月1日に「駒澤大学FD推進委員会」が設置され、本学のFD活動が本格的にスタートした。

本年はすでにFDの一環として「学生による授業アンケート」を実施し、また、FD推進委員会に小委員会を設け、今後のFDの具体的活動について検討している。これからの本学のFDが実りあるものとなるよう期待するところである。



■ ファカルティ・ディベロップメント (FD)

って何?

文学部教授 小野浩一 (小委員会委員長)

昔、コンビニ (コンビニエンス・ストア) ができ始めた頃、ずいぶん違和感のある言葉だと思ったが、今では何の抵抗もなくなった。同じように「ファカルティ・ディベロップメント (faculty development: 略してFD)」もやがてごく当たり前に使われる言葉になるだろう。ここでは、「FDの概略」と「なぜ今大学が“組織的”に取り組まなければならないのか」の2点について述べたい。

FDはもともとアメリカを中心とした欧米各国で行われていたものである。日本では、1998年、大学設置基準に「各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科単位で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修の実施に努めるものとする」と明記されるようになってから、各大学が本格的に実施するようになった。FDの具体的内容は概ね以下の4つに大別できる。

1. 教員の研究能力向上のための措置 (研究の促進)
2. 教員の教育能力向上のための措置 (授業の改善)
3. 教育課程 (カリキュラム等) の改善
4. 教育目標達成のための諸組織の改善

これらの努力は、従来も大学、学部、学科単位で、あるいは各教員が個人として行って来たものであるが、なぜ、今組織的な取り組みが必要なのであろうか。

まず第1は、大学の大量化である。高等教育機関に在籍する学生数が同一年齢層比で40%を超えた現在、大学に入学してくる学生の資質とニーズは一昔前とは大きく変わってきている。大学も各教員もこの事実を直視し、それに対応したカリキュラムや授業の工夫が求められる。

第2に、大学の大量化の結果として、大学教員の教育に対する資質が問われている。今までの教員は、どちらかというと自らを研究者として位置づけ、その傍ら教育に携わるといいう面が強かったのではないか。しかし、いまや大学生の教育は、教育について特別な訓練を受けていない研究者が、ついでの仕事として行えるような状態ではなくなっている。

第3は、教員が各自でおこなう改善努力には限界がある、という点である。かりに研究も精力的に行い、かつ教育についても熱意溢れる教員がいたとしよう。これは当然好ましいことではあるが、しかし、たとえば次に挙げるようないくつかの問題が生じることがある。

1. 授業が高度で、かつ視聴覚機材を駆使して、沢山の情報を提示するが、学生の方は消化不良を起こして勉強意欲を失う。
2. 「概論」の授業にもかかわらず、専門領域の話が多かったりすると、結果として学生は概論を学べないことになる。
3. 課題が多く、学生に過重な負担がかかるようだと、他の教科の勉強が疎かになり、結果として教育目標全体の達成が困難になる。

どんなに優れた人でも、自分自身のことを客観的に見るのは難しい。そこで重要なのが、他者からの評価やアドバイスである。「学生による授業アンケート」、「公開授業」、「研修」などにより、教員自身が常に授業改善に努めるとともに、学部や学科においてもカリキュラムや授業内容が適切かどうか、たゆまぬ点検が求められるのである。

■ 「学生による授業アンケート」の実施状況

本年度、FD推進委員会により、全学的な授業アンケートが下記のとおり実施された。

1. 実施期間
 - 前期 (前期終了科目対象) : 2004. 7. 6 ~ 7. 19
 - 後期 (後期・通年科目対象) : 2004. 11. 8 ~ 11. 20
 - 上記期間の該当科目の授業時間中に実施した。
2. 対象科目数および対象学生数
 - 専任教員が担当する科目のうち、担当教員が選択した2科目を対象とした。
 - 前期 67科目 4,440人
 - 後期 536科目 57,112人
3. アンケート用紙の種類

講義・演習科目	実験・実習科目
語学科目	保健体育実技科目

4. 実施科目数および回答数

前期 67 科目 (100%) 2,880 人 (64.86%)

後期 534 科目 (99.62%) 24,237 人 (42.44%)



授業アンケートに回答する学生

「学生による授業アンケート」を実施して

文学部教授 速藤 司

本年度より実施された授業アンケートの結果を見て、授業をする側の人間としてある程度自覚していることをそのまま読みとることができたところもあり、また、少々意外なことを読みとることができたところもあった。あまり自覚していないことを指摘され、改めてそのことに気づく機会とすることは、アンケートを受けることの意義の一つであることを実感した。また、「授業の受け取り方は様々である」という、至極当たり前のこともまた改めて感じた。一つの授業の中で、同じ状況を生き、同じ言葉、文字を見て、学生各人はそれぞれの受け取り方をする。お互いに言葉を共有しつつも、思いや意義までも共有することの難しさを改めて思った。

この試みは始まったばかりであり、項目等についても今後より良いものにするために検討すべきであろう(私のアンケート用紙に、他の教員の方の授業に関するコメントが書かれていることには大きな戸惑いと違和感をもった)。授業という一つの場を生きる教員と学生の双方が考え合い、より豊かな時間を過ごせるよう智慧を出し合っていくための一つの機会になればと希望している。

経済学部教授 堀 龍二

平成 16 年度から商学科に導入された「基礎ゼミ」は、全員履修となっているためか毎週欠席者はほとんどなく、アンケート実施日にもほぼ全員出席で 45 名が回答した。その意味で結果の信用性は高く、真摯に受け止めねばならない。「授業内容、教え方、満足度」などでは平均 3 点台後半、その反面で、「期待した内容だったか、友人・後輩に勧めたいか」という質問では平均 3 点程度の評価だった。この科目の一つの柱であったプレゼンやレポートの方法、文献・情報の検索方法、ノートの取り方や要約の仕方といったスタディ・スキルの演習を高く評価する意見があった一方で、練習問題の回答や意見などを人前で発言・報告するということに慣れておらず、戸惑いを示す意見もあった。科目の趣旨を学生に理解してもらうには、もう一工夫すべき課題が残されていると感じている。今回の結果を今後の授業方法を改善するために役立てたい。

「駒澤大学FD推進委員会」設置

2003 年 4 月 1 日、全学自己点検・評価委員会に、「FD 検討ワーキンググループ」が設置された。さらにその下に小委員会を設置し、本学の FD を組織的に推進するための検討が行われた。委員である教員自らが、FD に関する理解を深めるために外部講師を招き FD 勉強会で学んだ。



FD 勉強会 (FD 検討ワーキンググループ 2004.2.26)

2004 年 4 月 1 日、「駒澤大学FD推進委員会規程」が制定され、「駒澤大学FD推進委員会」を設置した。2004 年 6 月

には、第1回のFD推進委員会が開催され、本格的な活動を開始した。積極的にFDを推進することを目的に規程第6条に基づき、小委員会を設置し、FD推進委員会より付託された事項について、さらに検討課題ごとのワーキンググループを設置し、積極的に活動している。

駒澤大学FD推進委員会委員名簿

委員長	学長	大谷哲夫
副委員長	副学長	竹花光範
委員	仏教学部長	池田魯参
	文学部長	高橋文二
	経済学部長	清水 卓
	法学部長	藤本 茂
	経営学部長	宮城 徹
	医療健康科学部長	小山正希
	外国語部長	遠山博雄
	保健体育部長	大石武士
	短期大学部長	佐原作美
	仏教学部教授	池田練太郎
	文学部教授	小野浩一
	経済学部教授	光岡博美
	法学部助教授	高橋洋城
	経営学部教授	猿山義広
	医療健康科学部助教授	西尾誠示
	外国語部助教授	岩崎 皇
保健体育部教授	村松 誠	
短期大学教授	高野秀夫	
教務部長	廣瀬良弘	
幹事	総合企画室長	高橋正弘
	総合企画室企画課長	秋沢英策
	教務部学務課長	仁王聖雄
	教務部教務課長	瀬戸孝尚

注1) 印は、FD推進委員会小委員会委員

注2) 小委員会委員の任期は、平成17年3月31日まで。

小委員会の活動について

経営学部教授 猿山義広(小委員会副委員長)

今期、駒澤大学FD推進委員会小委員会(以下、小委員会)では、駒澤大学における今後のFDの取り組みについて検討するとともに、次年度以降の学生による「授業アンケート」の質問項目についてワーキング・グループを設けて協議した。検討を行った具体的な内容は以下のとおりである。

- (1) 教員の授業スキル向上および授業改善のためのサポート体制の整備
 - FD支援センター
 - 学生による授業アンケートの実施
- (2) 学生の受講スキル向上のための施策
 - 導入教育の実施
 - オフィスアワーの設置
- (3) 授業改善へ向けての具体的内容
 - 教員のための授業マニュアルの作成
 - シラバス作成のガイドラインの設定
 - 成績評価法に関する情報提供
 - TA制度の充実
- (4) 教職員のFD意識向上のための施策
 - ニューズレターの発行
 - 全学向けのFD研修会の実施
 - 他大学のFD活動に関する情報の収集および分析
- (5) 授業改善のための環境整備
 - 教場設備および視聴覚機器の充実
 - セメスター制の推進

次年度以降の授業アンケートについては、そのたたき台となるものを本年度実施されたアンケートをベースに、他大学との比較や、教職員および勉強会での講師の意見などを取り入れて再構成した。

なお、本年度は講義科目と演習科目で同一のアンケート用紙を使用したが、将来的には演習科目独自の様式を考える必要があるという方向で議論がまとまった。

FD勉強会で感じたこと

医療健康科学部助教授 西尾誠示（小委員会委員）

他大学から教育学の専門家を招いて行われた勉強会で共通することは、大学全体が組織的に教育能力の開発に取り組む、教員が授業内容をより充実させ、学生が積極的に勉学に勤しむ、その方法論と効果の評価である。大学の 대중化が益々進み、学生の知的関心が希薄になった今、教育方法全体を考え直す時期に来ている。学生の授業への関心の低さを彼らの資質と決め付けていないか。東海大学安岡教授の言葉を借りれば、如何に上手い講義で学生の勉学意欲を掻き立てるか、真剣な工夫が必要だ。大学改革が問われて久しいが、FDの本質は委員会の立上げのみではなく、授業等の具体的な教育実践の改善を中心に、目標を明確にして推進して行くことだ。今後、授業の技術論等について教職員間で講習会・研究会を定期的に開催し、活動を進めたい。



FDと私

仏教学部教授 池田練太郎（小委員会委員）

一年間の在外研究を終えて帰国した途端、FD推進委員会の委員を引き受けてくれと言われた。どこかで聞いたような気もするが、とにかく「FD」なるものについてはまったくの無知である。気が進まなかったが、結局引き受けざるを得ないことになった。

最初の委員会で、FDについて書かれた本を一冊頂戴した。恐ろしく範囲が広い。やっぱり自分には場違いだとの感を深めた。やむなくメンバーになった小委員会に出席してみると、どの委員もきわめて熱心である。感心するばかりでこちらの居場所がない。

10月、小委員会が開いた勉強会で講師の先生の話聴いた。講義の方法や授業中の言動について、思い当たる欠点をいくつも指摘されたように思った。気づいていなかったのである。大学の場が教育という任務を担っていることを考えれば、こと授業に関する限り、下手な授業を無理矢理聞かせるより、興味を持って臨んでくれる方が良いに決まっている。伝えたいことが明確に伝わる方が良いことも明らかだ。この

数ヶ月間、さまざまな貴重な意見を拝聴することができた。気づかぬうちに、私も少しばかり意識改革されたのかもかもしれない。

法学部助教授 高橋洋城（小委員会委員）

学生への伝達技術だけがFDではないにしても、それが重要な要素であるとするならば、私自身はとても自分のFDに注力してきた方だとは言えない。法哲学という科目の特性もあると思うが、毎度ながら教場に入って話し始める瞬間まで、今日は何を話すんだっけ、はたしてこういうまとめ方がいいのかな、などと思索しているし、たとえばフレックスAの講義をフレックスBで繰り返す場合であっても片方で考え方を変えてしまうことすらある。とにかくその日伝える内容に精一杯で、どうしたら効果的に伝わるか、学生の関心を引きつけられるかという、技術や手段のレベルにまで神経が回らないまま今日まで来た。いろいろ新しいことを試してみたい気持ちはあっても、試す労力と時間が授業前には惜しくなってしまうのである。というわけで、大学全体の教育のレベルアップは、もちろん個々の教員の努力によるものではあるけれど、個人が新しいことに踏み出す一歩を軽くしてくれる大学のバックアップがあれば、全体の状況は大きく変わってくるだろうと思う。

外国語部助教授 岩崎 皇（小委員会委員）

「授業方法の改善」と聞くと、そんなことは人から言われるまでもないとバカにされたような気がしたのだが、よくよく考えてみれば、これは教師の学生に対する態度の問題ではなからうかと、思うようになった。

相手がよく理解できないことをまくし立てたり、物を知らないからといってバカにしたりするのは、社会生活上好ましいことではない。そんなことは誰でも心得ているはずだが、教育の現場では無視され易いのではないだろうか。

知識量の違いは、金銭の所有量に似て、容易に上下関係を作り出す。相手を子供と見てしまうと、なぜそうするか of 了解を求めることなく、指図してしまうということが起こりがちだろう。

「教える」というと、何をどれだけ教えなければならぬとい

う固定観念にとらわれ易い。それは、学生を器に見立てて、いかに知識を詰め込むかに腐心するというのと同じである。学力の向上とか、成績を上げるためという目的とは異なる発想が求められているように思う。



授業風景

保健体育部教授 村松 誠（小委員会委員）

本年度から駒澤大学でもFD推進委員会が設置され、計らずも委員としてFD推進に関わる事になりました。私事ながら、駒澤大学にお世話になってから教材、教具の工夫から、教育機器の導入など大きく変わってきています。また、大学の大量化とあわせて学生気質などの変化もあり、当然のことながら授業という形態も変化をしていかなければならないことは当然のことのように思えます。授業の成立を、教師の働きかけによる学生の変容と捉えますが、これはある意味ではキャッチボールであると私は見えています。このボールを送り出す道具（教具）も今ではコンピュータの発達により、より多角的に送り出すことができるようになりました。しかしながらそれを使いこなす技術がなければ無い事に等しいこととなります。また、受け取る側の問題もあげられると考えています。どんなにすばらしいボールを投げても、それを受け取る能力のない人間にとっては苦痛でしかなくなると思います。どのようなボールを工夫するかは、すでに個人のレベルでは限界に達しており、組織的な支援が必要になっている時代ではないでしょうか。

これまでの学部・学科等でのFDの取り組み

経済学部教授 光岡博美（小委員会委員）

経済学部では、数年前より、毎年11月の時期に、学生に

対して授業評価アンケートを実施しています。学部内に設けられた学部改革委員会（現在は共通問題検討委員会に改組）が中心となり、学部執行部の責任で、集計結果がまとめられています。ただ残念なことに、その集計結果に基づいて、授業改善のための具体的な方策のための議論が不十分で、せっかくのアンケートが十分に活かされていないことです。今回の全学授業評価アンケートの実施を契機にして、学部内での教員間のFDについての交流が進展することを期待します。

また、経済学部では、この三年間の期間に、導入教育としての「基礎ゼミ」（半期2単位科目・経済フレックスBと商学科）が新設され、経済フレックスAにも新設される見通しです。さらにクラス制（1年次生のみ）やオフィスアワーも設置されました。これからも学生に対する教育サービス向上へのいっそうの努力を行う決意です。

短期大学教授 高野秀夫（小委員会委員）

駒澤短期大学英文科は、全学に先駆けて学生による授業評価を実施し、もう10年になりました。英語、英語学、英米文学関係の科目についての項目を5段階評価で、記述式の項目も加えての学生による授業評価でした。評価の結果は、科目別平均値評価と持ちコマ全科目合計平均値評価を出し、非常勤教員には、コメントを付して、学年末に一覧表にして、次年度の授業に役立つように通知しました。徐々に数値が上がってきましたが、平成12年度には、全学に先駆けてセメスター制度の導入に踏み切り、授業が週2回になり、授業評価は驚くほどよくなりました。このことから、特に語学の科目は、短期集中的に学ぶ方が効果があり、学生にも好ましいことが分かりました。活気のない授業はすぐに数値となって表れるので、絶えず工夫しながら進めていかなければならないという姿勢が求められます。10年という一つの節目を迎え、より良いものを目指して、ただ今模索中です。

FD活動の今後の期待

文学部教授 廣瀬良弘（教務部長・小委員会委員）

FD活動の中心であり、もっとも重要なものが、学生による「授業評価」である。他大学が実施しているから行うというのはいか

がか、との意見があったが、本学の深刻さがそれに勝り、実施となったということであろう。この実施は、私個人としても、かなりのプレッシャーとなった。おそらくこの緊張が全学の専任教員の間で走ったことであろう。これだけでも効果はあった。この結果が教員個々に知らされる。板書に工夫が欲しい、声が小さい、説明が解りにくい、自宅学習させる形をとると能率が上がるのではないかなど、指摘されて当然というものもあり、意外だが納得というものもある。是非これらの指摘に対して授業の場で、学生と対話して欲しい。アンケートはどうなったか、と思っている学生もいよう。

大学全体の問題としては、ただ、データをまとめるだけではなく、そこで得られた結果から、何をなすべきかを明確にし、それを実行して、改善点が実際に数字の上に表れるようになって、一歩前進ということであろう。単なる指摘で終わることがないようにしたい。

FD活動は、学生による授業評価、視聴覚や情報に関する機器の活用、TA等と共同での教授法の開発と研修、相互の授業参観、研修会、教授法に関するフォーラムや講演会の開催等多岐にわたる。この「FDニューズレター」の発行もその活動の一つである。本学でも少しずつ進められているものもある。実行可能なものから進めていく以外にない。また、各学部等の各セクションで進める部分もある。今後の期待は大きい。現在、総合企画室のなかに、「FD係」ともいべき企画2係がある。FD活動を一手に推進してきているが、将来はその拡充（「FD推進係」あるいは「FDセンター」のようなもの）が必要になるうか。

駒澤大学FD推進委員会の今後の活動予定

駒澤大学FD推進委員会小委員会開催

2005年1月31日(月)16:20

「FD研修会」開催

2005年2月28日(月)14:30

2005年度の授業アンケートの実施について

前期 2005年7月上旬

後期 2005年10月中旬

FD活動についてご意見がありましたら各学部等の小委員会委員までお申し出ください。



駒澤大学FD推進委員会規程

(平成16年4月1日 制定)

(趣旨及び設置)

第1条 駒澤大学及び駒澤短期大学に、ファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)を推進するため、駒澤大学FD推進委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(FDの定義)

第2条 この規程において「FD」とは、教員が授業内容・方法を改善し、向上させるために行う、各学部等及び短期大学の組織的な取り組みをいう。

(審議事項)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 授業評価の実施に係る企画・運営に関すること。
- (2) 教員の教授方法等の改善のための支援に関すること。
- (3) 各学部等及び短期大学が行うFDの支援に関すること。
- (4) FDに係る、施設・設備等の改善に関すること。
- (5) 講演会及び研修会等に関すること。
- (6) その他FDの推進に必要な事項に関すること。

(構成)

第4条 委員会は、次の各号に掲げる者をもって構成する。

- (1) 学長
- (2) 副学長
- (3) 各学部長等
- (4) 各学部等及び短期大学から選出された者各1人 計9人
- (5) 教務部長
- (6) 幹事 若干人

2 委員会の委員長は学長とし、副委員長は副学長とする。

3 第1項第4号によって選出された委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 欠員を補充するために選出された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第5条 委員会は、委員長がこれを召集し、その議長となる。

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

3 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立する。

4 FD推進委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決議し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

5 委員会は、必要に応じて委員以外の者の出席を求めることができる。

(小委員会)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員会に小委員会を設置することができる。

2 構成員等については、委員会が決める。

(FD推進部会)

第7条 各学部等及び短期大学にFD推進部会を設置する。

2 部会長は各学部長等とし、構成員については各学部等及び短期大学が決める。

(事務所管)

第8条 委員会の事務所管は、総合企画室とする。

(改廃)

第9条 この規程の改廃は、委員会の議を経てこれを行うものとする。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

編集後記

経営学部の教員という自分の立場から見ると、FDとは授業という大学の主力商品の質を高めるための取り組みであり、企業においてはきわめて当たり前の活動である。そして、商品である以上、購入者(大学においては学生)からの評価・要望に基づいて改善に努めることも企業ではきわめて当たり前の対応であり、これを怠った場合、競争上不利な立場に陥るであろうこともきわめて当たり前の帰結である。つまり、FDとは綺麗事ではなく、当たり前の組織業務なのである。

もちろん、自分も教育・研究者の一人である以上、授業が安易に商品化されることに対する抵抗感はあるし、おカネには容易に置き換えられない大事な何かを学生に伝えるのが大学本来の役割であると信じている。だからこそ、自分の授業が大事な何かをきちんと伝えられているかどうかは気になるし、よりうまく伝えられるような方法があるなら、その方法

を積極的に導入してみたいと思う。教育・研究者としての自分にとって、FDはあくまでもそのための補助手段にすぎない。

現段階において、駒澤大学には、組織にとってのFDと個人にとってのFDとの間に以上のような多少のギャップが残されているように思える。そして、このギャップが解消されるような形でFDが展開されるなら、それは間違いなく素晴らしい成果を大学にもたらしてくれるはずである。おそらく、FD推進委員に共通する目的意識もそこにある。そうでなければ、各委員多忙な中、夏休みを除けば約2か月半という短期間に4回の小委員会と2回のワーキング・グループが開催されることはなかったはずである。

この度創刊されたFD NEWSLETTERは、駒澤大学という組織にとってのFDと個々の教員にとってのFDとの間にあるギャップを少しずつ、しかしながら着実に埋めていくための作業の記録である。創刊号では駒澤大学FD推進委員会委員長である大谷哲夫学長を筆頭に推進委員の方々、そして実際に授業アンケートを実施された方々にも率直な感想を述べてもらった。大学としてはできるだけ早期に統一的なFDの方向性を打ち出す必要はあるのだろうが、現段階においては、それぞれの意見を等しく尊重したい。

そして、いつの日か駒澤大学にとってのFDと教員個人にとってのFDとの間のギャップが解消され、FDが通常の業務の一部になったとき、FD NEWSLETTERはめでたく廃刊されることになるだろう。一日も早くその日が迎えられることを願ってやまない。(猿山義広)

FD NEWSLETTER Dec.2004 創刊号

発行日：2004年12月20日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

03-3418-9867 Fax 03-3418-9037

(事務局：総合企画室)